

現在、リハビリテーション・スタッフは、個々のアイデンティティを確立し、また独自の課題にも直面している。リハビリテーション・チームの各分野では何が起こっているのか、それを紹介するのが本特集の目的である。

■ リハビリテーション医学の分野「障害評価手段開発の背景と現状について」

最近、能力障害評価法として FIM という言葉を良く聞く。米国のリハビリテーション医は、医療費支払い側の圧力に対し、リハビリテーション医療の正当性を主張するための戦いを継続中である。FIM をはじめとした一連の障害評価手段はその武器である。著者は、そのような米国の事情を紹介し、同時に機能障害評価の重要性を考える立場からわが国で独自に開発された SIAS について言及している。(園田 茂氏, 279 頁)

■ 理学療法の分野「生涯学習システムについて」

少数職場に勤務する理学療法士は、仕事上の問題を相談する相手に困っている。また養成機関が増加し、年間 2,800 人が供給されるとともに、養成機関の階層化から学歴上の身分格差が生ずる気配がある。日本理学療法士協会は、これらの問題を解決するために「生涯学習システム」を計画している。これは新人に対して系統的な学習の機会を提供するだけでなく、個々の理学療法士の実績を組織的に評価して「専門理学療法士」を誕生させることを目指している。(半田一登氏ら, 287 頁)

■ 作業療法の分野「作業療法理論の再考」

作業療法が誕生した時の理念は、作業療法士が置かれた環境の影響を受けて、米国およびわが国で変遷を遂げてきた。たとえばわが国では、作業療法士の活動が病院内から地域へと拡大するとともに、業務内容や学会発表に医学モデルから離れたものが出てきた。一方、研究活動は多岐に及ぶようになり、作業療法全体としての統一性や、作業療法を系統的に研究する体制の確立が課題になってきた。(佐藤 剛氏, 293 頁)

■ 言語療法の分野「言語療法における嚥下障害への取り組み」

嚥下障害は、“silent aspiration”まで含めるとかなり高頻度で発生する。その治療には、食事摂取に関わる種々の要素を網羅的に分析し、その結果を統合しなければならない。これにはチームアプローチが必要である。そして嚥下障害の評価や具体的な訓練プログラムを計画するうえでは、言語療法士に多くを期待することができる。(矢守麻奈氏, 299 頁)

■ ソーシャルワークの分野「資格問題をめぐって」

長年、保健・医療分野で働くソーシャルワーカーは、明確な資格が確立されていないまま、患者と家族への援助を続けてきた。これに対し、保健・医療分野、あるいは精神保健・医療分野で働くソーシャルワーカーの団体から、それぞれ資格制度を求める動きがある。また保健・医療分野のソーシャルワーカーについて、系統的な教育を行うための卒前・卒後教育の充実が課題として指摘されている。(長谷川真砂子氏, 305 頁)

■ リハビリテーション工学の分野「テクニカル・エイド・センター構想をめぐって」

福祉機器の特性や適応、さらに個人のニーズを理解し、両者を適合させることは簡単ではない。一つの解決方法として、普遍的なニーズがある機器類と、希少なニーズに対応する機器類に分類することが考えられる。そして特殊な機器については、広域的支援を行うテクニカル・エイド・センターにおいてエンジニア等が適応を判断し、またニーズに応じた機器開発を行うことが考えられる。(市川 冽氏, 311 頁)